

大津市立真野北小学校～古墳のある学校～

「真野北がふるさとである」と胸をはって言える子どもを育てたいと平成 29 年度より学校運営協議会を設立しコミュニティ・スクールをスタートさせました。「学び合い、共に伸びる子どもの育成」のため、学校と地域のつながりを生かしながら、学校・家庭・地域で課題を共有して解決を目指します。

「学習コミュニティ」「心のコミュニティ」「地域コミュニティ」の 3 つのコミュニティを組織し、「学校の教育活動に地域の力を取り入れること」「地域・家庭・学校の連携による活動の充実」「学校から地域活動への参画」を図っています。地域コミュニティ行動計画の中の一つ、真野北について知ることによって「ふるさと真野北」を好きになる地域学習を紹介します。

1. 取組の概要：「ふるさと真野北」を好きになる地域学習

真野北学区は 1970 年代に計画、造成が始まり、20 年ほどかけて完成された住宅地で、当然そこに住む住民はいろいろな地域から寄せ集まって構成された新興地域である。一方、曼陀羅山古墳群を学区内に持ち、6 世紀後半(古墳代後期)の円墳が真野北小学校北側に隣接した場所から見つかるという古い歴史をもった地域でもある。

この両方を学ぶことは、地域を知り、地域を好きになり、「真野北がふるさとである」と胸をはって言える子どもに育てるために必要と考え、6 年生総合的な学習の時間の単位として取り組んでいる。

★円墳の発見と保存に向けた取り組み



真野北小学校北側に隣接する土地から市内でも珍しい畿内型石室を持つ円墳 5 基が平成 26 年 2 月に見つかった。最初住宅開発に伴い撤去する計画があったが、当時の 6 年生児童が地域の貴重な歴史遺産が失われることに心を痛め、「古墳をもっと勉強したい」と越大津市長に掛け合ったのがきっかけで、1 基が敷地内に残り、古墳公園として整備されることになった。本校児童は毎日大昔の人が眠っている石室を目にしながら学校生活を送り、6 年生では社会科や総合的な学習の時間に学んでいる。

・6年地域学習：古墳巡り



＜学校敷地内古墳前＞



＜和邇大塚山古墳前＞

学校敷地内の古墳前で説明を聞き、学校を出発して曼陀羅山に登り、曼陀羅山古墳群の和邇大塚山古墳を経て、また学校へ戻るという1時間強のコースを歩く。講師は古墳や古代史の専門家でもある本校7代校長の山本伊三郎氏である。曼陀羅山の上からは真野北小学校を含む地域が一望に見渡せ、地域を知る生きた教材となっている。この後、各グループで調べたことや学んだことをもとに新聞を書き、まとめとした。

また、学校の環境整備作業として取り組む年3回の除草作業と、「真野北古墳公園を愛する会」が行われる古墳公園の除草作業をドッキングさせ、地域の方と子どもと保護者がともに汗を流して、古墳を大切にする取組としている。

古墳から出土したもの



・6年地域学習：真野北学区の成り立ち

自治連合会長でもあり、学校運営協議会会長の大澤光雄氏から真野北学区の成り立ちについて、講話してもらっている風景である。自分たちの家や学校のあるところがまだ山であった頃から、徐々に造成が進み今の街ができた経過を教えてもらい、子どもたちからは驚きの声が上がった。真野北学区ができ、寄り合い、自治会組織ができていくなかで、歴史の新しい街を子どもたちにとって「ふるさと真野北」となるように、夏祭りや餅つき大会などの行事をつくられた意図を聞き、自分たちが大事にされ、地域の方に守られていることを深く感じる事ができた。



＜画面はまだ山の緑町＞

2. 「ふるさと真野北」授業の感想

<古墳巡り>

- ・曼陀羅山には曼陀羅山古墳群に一つしかない前方後円墳があった。(和邇大塚山古墳)
この前方後円墳は4世紀から5世紀の間に作られた。
学校にあるのは円墳で、6世紀頃からあったと聞いて驚いた。
古墳のことをよく知らない昔の人が、古墳の中のまがたまとか銅鏡など持ち出してしまったらしく、出土品がなくなっている古墳もあった。
- ・学校の中にある円墳は横穴式石室で、上に墳丘という土が丸く盛られて、中に死んだ人を箱に入れて運ぶための羨道、そして死んだ人を入れた箱を置くための玄室がある。玄室から死んだ人が大切にしていた腕輪や首飾りが出てきて、エジプトのピラミッドと同じだと驚いた。
大事にされていたのだなと思った。
- ・ぼくの学校の中には古墳があります。残っているのはこれだけです。あとの4つの古墳はつぶされてしまいました。だけどここの古墳は今高校1年生の人が残してくれました。
よかったです。
- ・昔、真野北には111個も古墳がありました。残念ながらほとんどくずれてしまいました。
でもちゃんと残っている古墳が何個かあります。その古墳は円墳という古墳で、学校の横で古墳公園になっています。
昔に作られたものが今も残っているのはとてもすごいことです。



5号墳

<真野北学区誕生>

- ・真野北の街ができる前は山と丘と田んぼしかないところでした。
道がまっすぐなのは、宅地をたくさん造成するためでした。
山を残した理由は古墳があるからでした。
開発される前には池が4つあり、そのうちのひょうたん池にはカップ伝説があったそうです。
- ・昔、ゾウの化石が見つかったこともある。
真野は飛鳥時代にはもうできていて、神田神社は1370年にはできていた。
最初にできたのは美空団地で1973年、小野の町の方が先にできて1975年、向陽町花園町が1995年にできて順番にできていって、今の8つの町になった。
本当は山を全部削って、ニュータウンにしたかったけど、古墳があったので、山を残すことになったそうだ。古墳がなくならなくてよかった。
- ・真野北は自然がいっぱいあって、古墳もあって、桜もいっぱい咲いていい街だと思う。
災害も少なく、今までに一度だけ山崩れが起きたそうだ。
新しい家が多いので、地震には強いらしい。
- ・真野北は新しい街だけど夏祭りや餅つき大会など、楽しい行事がいっぱいある。みんなが楽しい思いができるように、大人の人がつくってくれたことがわかった。
今年の夏祭りは去年の6年生の人がみんな来ていた。来年ぼくも行くだろうと思う。そこでまたみんなに会えるから楽しみだとおもった。



3. 「ふるさと真野北」授業の意義と今後の課題

「大津市立真野北小学校～古墳のある学校～」をもっと前面に押し出して活動していこうというのが、第4回学校運営協議会での話題である。歴史遺産が敷地内にあり、常時子どもたちの目に触れるという本校にしかない、この恵まれた状況をもっと活用していきたいと考えている。

また、発見当時の子どもたちの声が大人を動かし、行政や企業を動かし、そして今があるということを伝えていくのは真野北小学校の責務である。当時の様子を直接知っている職員はどんどん少なくなる現状であるので、このことが風化しないよう、「ふるさと真野北」授業を教育課程にしっかりと位置づけ、全教職員で進めることを大切にしていきたい。

冒頭に述べたように、今年度コミュニティ・スクールとなることで、今まで以上に地域の方との交流が増え、お互いの顔が見える関係が構築されつつある。子どもたちも同様に、学校の中に地域の方が先生としておられることが、普通になっている。まだまだ取り組みを始めたばかりで、形になっていないものが多いが、教職員だけではできなかった様々な活動ができ、学校が活性化したことは事実である。また地域の方が「子どもの顔を見ると元気がわく」「子どもと過ごすとおつという間に時間がたつ」と嬉しい言葉をもらい、学校運営に参画しているという自負をもっていただいていると感じる。まだまだ地域創生にはいたらないが、これから細く長く続けることで、できることも増えていくであろうと感じている。この実践を続けることで、地域を愛し、地域を大切にする事で子どもが自分の将来に夢を持ち、「真野北がふるさとである」と志を果たしにふるさとに帰ってきてくれることを強く望んでいる。

10/18第3回学校運営協議会での熟議より

<地域コミュニティ>

敬老週間に、敬老会の方へお弁当を配布する際、子どもたちのメッセージを添えたところ、とても喜ばれた。そこから、難しいことを考えるのではなく、すぐできるアイディアを出し合った。

●地域の文化祭に子どもたちの参加

が少ないという話から、真野北小の展示コーナーを設ける案が出た。これにより、小学生の参加が増え、ご両親、祖父母世代の参加につながる。孫世代の小学生から誘わ

れることは祖父母にとってはとても嬉しい。展示コーナーを支所等に常設する事で、地域の活性化につながるのではないかな。

●大津市はカルタ発祥の地でもあるので、カルタ大会を開催してはどうか。

百人一首を覚える事は、いろいろな勉強にもつながる。

●学校に古墳があることは、非常に珍しいことであり、古墳を子どもたちも大切にしてほしい。

大切にすることを育てるために、古墳の除草清掃活動をいっしょに行うのはいいことだ。

機械を使わないで草引きをすれば、安全に活動を行うことができる。

